



進路選択による自己明確化尺度の作成

ガン, デル
谷, 冬彦

(Citation)

神戸大学発達・臨床心理学研究, 21:17-21

(Issue Date)

2022-02-28

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100476911>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100476911>



進路選択による自己明確化尺度の作成 Development of the Self-clarification Through Career Decision-making Scale

ガン デル* 谷 冬彦**
Deer GAN* Fuyuhiko TANI**

要約：本研究では、進路選択を発達のプロセスとしてとらえ、進路選択による自己概念の明確化を測定する尺度がないことから、進路選択による自己明確化尺度を作成し、その信頼性および妥当性を検討した。Super (1957) の職業的発達における自己概念の発達に関する記述をもとに項目を収集し、心理学を専門とする研究者2名によって内容的妥当性が確認された。近畿地方の大学生に調査協力を依頼し、質問紙調査を行った。192名のデータについて統計的分析を行い、主成分分析の結果から、明確な一次元構造が確認され、10項目が選定された。確認的因子分析も行い、データと一因子モデルの適合を確認したところ、採択を許容できる適合度指標の値を得た。 α 係数は高い値を示し、信頼性が確認された。また、モラトリウム尺度および選択回避尺度との関連から構成概念妥当性における収束的妥当性が確認された。

キーワード：進路選択, 自己概念, 自己明確化尺度, 信頼性, 妥当性

1. 問題

「職業」、「キャリア」、「進路」という言葉は、同義語のように使われる場合が多いが、実際にそれらはいくつ分異なった意味をもっている。Super & Bohn(1970)によると、職業は人がそれにたずさわる仕事の活動の一タイプであり、施設は違っても組織の仕方が同じ類似課業(task)の一群であり、また市場価値のある活動、そしてそれゆえに人々がそれによって報酬を得る活動である。それに対してキャリアは一人の人がその生涯にわたって従事し、または占めるところの職業・職務・職位の前後連鎖したものである。長期にわたって非常に安定している職業において、職業とキャリアは混同されがちであるが、多くの人の場合、キャリアは一つの職業からほかの職業へ(あるいは一つの会社からほかの会社へ)の一連の移動を意味する。そこで、職業は「人が現実になしているところのもの」であり、キャリアは「一定期間にわたって追求される過程」である(Super & Bohn, 1970)といえる。

これらと対照的に、進路とは元々進んでいく道という意味であり、職業よりはキャリアに似ている概念である。日本において、進路は主に高卒や大卒の若者に対して使う言葉であり、大学ある

いは大学院への進学、就職、専門学校または留学などはすべて進路となる。それに対して、キャリアというのは社会人になって職業がかなり安定している人に対して使うイメージがある。高校や大学を卒業し、自分の将来を模索し計画する人が、キャリアという視点で選択を行うことがほとんどなく、進路を選択してから、将来的に身を任せるキャリアを作り上げていくと考えられる。したがって、若者の進路発達の延長線上にキャリアがあり、進路とはキャリアの早期段階であるとみなすことができる。つまり、若者は進路選択から出発し、自らのキャリア形成に取り組んでいくのである。

学校から仕事社会への移行途中にある学生は、試行や探索を繰り返しながら将来の選択へつなげることを課題としている(Super, 1957)。そのような過程は「キャリア探索」であり、キャリア探索とは、自分自身や仕事、職業、組織について情報を収集し理解を深めることで、仕事世界への移行やその後の適応プロセスに関わりをもつ意図的行動とされている(Stumph, Colarelli, & Hartman, 1983)。こうした探索課題が望ましいかたちで達成されてこそ、仕事社会の一員となり、キャリア形成し

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究所
** 神戸大学大学院人間発達環境学研究所准教授

2021年11月30日 受稿
2022年2月24日 受理

ていく力が備わるといえる (Bartley & Robitschek, 2000)。したがって、進路選択はキャリア探索の一つの課題であり、キャリア探索によってキャリアが形成されていく方向性があると考えられる。

また、「進路選択」と「職業選択」を同義語のように使う場合が多いが、「職業は人が現実になしているところのもの」という定義からすると、職業選択は単に就職先を決めることを意味しているといえる。それに対して、進路選択は、現在から未来にかけての行く道を選択する意味、つまり未来に向けてキャリアを自ら作り上げていくという意味で、職業選択はその中に内包されていると考えられる。そして、選択はひとつの出来事というよりは、ひとつのプロセスである。Super (1957) によると、職業選択は、最終的に職業を決める時点まで一連の準備段階を有し、あるところに就職してから継続する発達のプロセスである。それゆえに、ある人の職業選択は、大学に進学し、免許をとり、卒業する時点で就職先を選ぶなどのいくつかの選択でもって成り立つ。その後も、その就職先でずっと働か、自分で開業するかなどの選択をする必要があり、職業選択の過程は継続する。同様に、進路選択も一時的な選択ではなく、一連のプロセスであり、大学を卒業する時点での就職あるいは進学を選択は、いくつかの選択でもって成り立つのである。その後も、進路選択の過程は継続する。つまり、選択という言葉に一時的な行為の意味合いがするが、実際に選択とは発達の過程である。

したがって、Super (1957) は職業的発達理論を提唱し、職業的発達は人生の初期にはじまり、一つの曲線に沿って人生の末期まで進んでいくものと定義した。また、「キャリアは職業・職務・職位の前後連鎖したものである」という視点で、職業的発達もキャリア発達を意味しているのである。すなわち、進路選択はキャリア探索の一つの課題であり、職業的発達、あるいはキャリア発達の一部分だといえる。

Super (1957) によると、職業的発達の中核は、自己概念の発達である。自己概念とは、ある人が自分自身について抱いている像を明らかに考慮したパーソナリティーの概括的記述である。さらに、Super (1957) は、職業的発達の過程は、「成長段階」(受胎～ほぼ 14 歳)「探索段階」(15 歳～24 歳)「確立段階」(25 歳～44 歳)「維持段階」(45 歳～64 歳)「下降段階」(65 歳以降)の 5 つの段階からなると定義した。そんな中、大学生は探索段階にあたり、Super (1957) の考えに従えば、大学生の進路選択とは「青年期にかけて次第に明確化される自己概念が職業世界へ表出する過程」である。

よって、進路選択は探索段階の活動であるが、その基盤、つまり自己概念の形成が子ども時代から始まるのである。Super (1957) によると、人間は、生まれつき、一定の行動能力、および筋肉的・神経的・内分泌的な傾向をもち、それらが所定のタイプの能力やパーソナリティーの発達を容易にし、あるいは難しくする。その上、身体的、心理的、社会的な成長につれて、自分に何ができるか、何がやりたいか、他人が自分に何を期待するかということを考えるようになり、自己概念が形をとりはじめる。さらに、学校と家庭における主要人物との同一視を通して自己概念が発達し、青年期になると次第に明確化してきて、それ以前のす

べての経験から獲得した社会と自分に対する総合的な認知をもち、自分の可能性とそれを左右する社会について探索し始める。その探索は、Super (1957) によると、自我の全く新しい姿を発達させる過程というより、自我をことばで表現し、これによって、ある種の役割を引き受けたがっている者として、社会にはどんな種類のはけ口があるかを見つけ出すだけの基礎を発達させる過程、次いで現実の線に沿う自己概念を変容する過程である。

したがって、進路選択はその探索の過程だと考えられる。その過程において、現実吟味を通して興味、価値、能力が統合されつつ職業の意味への翻訳がなされる。青年は勉強やアルバイト、インターンシップやボランティア活動などの社会的な活動を通して探索しながら現実の社会に接し、自分を試しながら社会と社会に与えられているはけ口、つまり進路に関する理解を深めていく。それとともに、このような役割実験を通して、自分の適性や適性と合う職業、自分の特徴や自己を生かす最も理想的な場所についてあらためて問い直し、それまでの経験をもとに自分にとって望ましいものが選択され、逸脱したものが放棄される。その上、「今の自己」と、「大人社会で生きていく自己」が明確化してきて、自己概念が変容する「自己明確化」が起こると考えられる。

そこで、「進路選択による自己明確化」についていくつかの研究がなされている。進路選択と深い関連のあるキャリア探索の測定について、Stumph, Colarelli & Hartman (1983) による Career Exploration Survey (以下 CES とする) が代表的な尺度である。Stumph et al. (1983) によると、キャリア探索は自分について考え評価する自己探索 (self-exploration) と、仕事世界についての情報を得る環境探索 (environment exploration) の二つから構成される。したがって、CES は、自己と環境の二側面から探索を捉えるもので、項目数が少なく実施の簡便性も手早い、若者のキャリア探索研究において繰り返し使用されて来た (安達, 2010)。しかし、CES は、既に就職活動を開始した者や、活動を終えた者から得た記述をもとに項目が作成されているため、本格的な就職活動を始めていない学生の探索状況を調べるには不向きといえる (安達, 2010)。

日本において、安達 (2008) は自己と環境に、他者から学ぶという新たな軸をくわえた三側面からなる就職活動が本格化する前段階にある学生をターゲットにしたキャリア探索尺度 (Initial Stage Career Exploration Inventory : 以下 ISCEI とする) を作成した。さらに、安達 (2010) は対象を広げ、ISCEI を再検討し、日本においてキャリア探索の初期段階にある学生の探索行動は、自己と環境という二軸に基準がおかれていることが示された。

浦上 (1996) は、女子短大生の職業選択過程について調査し、教養学科生においては、就職活動の程度が、一般的、職業的の両自己概念の明確化に影響を与えていると指摘した。実際の就職活動を計画したり実行したりすること、特に会社訪問や面接などは、自己のあり方などを再考する契機となり、このような経験は、一般的な自己概念を再検討することを促すのであろう (浦上, 1996)。つまり、「就職活動によって自己明確化が起こる」ということが含意されている。しかし、幼児教育科生においてそのような関連が見られなかった。それは幼児教育科を志望し、在籍しているということは、過去において自分の職業をある程度見通していたと考

えられ、また専門性の高い専攻であるために、就職先が限定されており、就職活動を通し、再度自己や職業について考え直すことがおこりにくいからであろう（浦上，1996）。

また、Grotevant（1987）は、自己概念と深い関連があるアイデンティティについて、ある課題を探究していく中で、その課題領域においてアイデンティティ形成が進行するモデルを提唱しており、高村（1997）は、日本の大学生の進路選択課題に焦点を当て、「職業選択を進めていく中で、自己への問い直しが進み、アイデンティティが形成される」という形で Grotevant のモデルを検証した。加えて、大西（2017）は、学生は就職活動を通して自分がどのような人間であるかを考える上で、自分がこれまでやってきたことを振り返り、意味づけをしたりし、これからの将来をどのように生きていくか、自分にとって働くということとはどのような意味があるのかということを考えていたと報告した。さらに、就職活動による自己成長感尺度を作成し、因子分析を行った結果、就職活動による自己成長感が「自己明確化」「自賛・自信」「肯定的職業意識」の3因子から構成されることが明らかになった（大西，2017）。

一方で、職業選択に必要な情報の処理過程として捉える職業意思決定論の研究においても、自己明確化についていくつかの知見をもたらしている。職業選択において、最終決定に至るまでに初めに何らかの選択基準によって選択肢を順次、排除して選択の幅を絞り込む方略を用いて、その後、絞り込まれた選択肢を相互に比較検討して全体的な評価を下す方略を用いるという情報探索方略が活用される（下村，1996）。そのうえ、下村（1996）が、大学生の職業選択における情報探索方略について調査した結果、主に自分の能力、職業に対する興味、職業選択に対する自分の目的・目標などの主観的な情報である自己関連情報について探索した上で、それらの情報を選択基準にして職業意思決定を行っていることが明らかになった。

また、Gati, Krausz & Osipow（1996）がアメリカとイスラエルの大学生の進路選択における困難について実証的研究を行ったところ、進路選択を行うための困難は主に準備性の欠如（Lack of Readiness）、情報の欠如（Lack of Information）、矛盾の情報（Inconsistent Information）の三つに分類されると示された。その中、情報の欠如は、自分に関する情報の欠如、職業に関する情報の欠如と付加的な情報の獲得方法に関する情報の欠如と分類され、自分に関する情報とは主に自分の好み（何が欲しい）と能力（何ができる）に関する情報とされている。つまり、進路選択において、興味、能力などが明確化されていないままの進路選択は困難であり、自分に関して探索し、現実吟味を通して興味、価値、能力が統合され自己概念を明確化した上で、進路選択が行われると示唆されている。

したがって、以上の研究から、進路選択において、青年は自己と職業についての関係を吟味し、「今の自己」と「将来のなりたい自己」が明確化され、「自己明確化」が起こると考えられる。しかし、以上の研究で「自己明確化」が単なる全体的な過程の下位側面として報告されており、進路選択による自己明確化を焦点として扱った実証的な研究が非常に少ない。そのため、本研究では、Super（1957）の論述に依拠にし、進路選択による自己明確化に

焦点を当て、測定できる尺度を作成することを目的とする。なお、進路選択による自己明確化について明確に論じている心理学者が Super のみであるため、進路選択による自己明確化を測定する一次元尺度を構成することとした。

次に、モラトリウム尺度および選択回避尺度との関連を明らかにすることで、進路選択による自己明確化尺度の構成概念妥当性を確認する。

Erikson（1959）は、現代社会において青年が成人期に入るまでの一定猶予期間を「心理社会的モラトリウム期」と命名した。小此木（1977）は、Erikson の提示した心理社会的モラトリウムには自立への渴望や真剣な自己探求といった特色があるのに対して、日本の青年のモラトリウム心理にはそれとは全く異なる全能感、しらし、遊び感覚という特色があると指摘している。また、Erikson（1959）は、心理社会的な課題に直面化し、なんらかの選択をしなければならないときに、そのことから回避してしまうような同一性拡散における臨床像を「選択の回避」という言葉によって概念化している（谷，1999）。そういう意味で、「選択の回避は怠慢によるモラトリウム」である（Erikson，1959）。以上より、進路選択による自己明確化は、モラトリウム心性、選択の回避と関連があるといえる。そのため、本研究においては、進路選択による自己明確化尺度を一次元構造と仮定し、信頼性を確認するとともに、モラトリウム尺度・選択回避尺度との関連から構成概念的妥当性の検討を行い、進路選択による自己明確化尺度を作成することを目的とする。

なお、専門性の高い専攻では、学生は就職先が限定されていることを認識して進路選択活動を行うため、進路選択における自己と職業についての吟味や自分を新しく問い直す過程が起こりにくいと考えられる。そこで、本研究では進路選択の幅が広い人文科学・人間科学系学部にも所属する学生を対象とする。

2. 方法

調査時期および調査協力者

2021年10月から11月にかけて近畿地方の大学の学生に、講義中に質問紙調査の説明を書いた文書を配布し、調査協力依頼を行った。「大学生の日頃意識に関する調査」として協力を求め、Google フォームで回収した。回答者のうち、不備のなかった192名（男56名、女134名、不明2名、平均年齢は20.0歳、 $SD=1.46$ 、範囲は18～25歳）を分析対象とした。学年ごとに、一年生51名、二年生100名、三年生36名、四年生5名となる。

質問紙の構成

1. 進路選択による自己明確化尺度

Super（1957）の記述を参考にしながら、独自項目を新たに作成した。次に、心理学を専門とする大学教員2名より、項目の内容的妥当性が検討され、最終的に10項目が選定された。教示文は、「以下それぞれの質問項目は、普段のあなたにどの程度当てはまりますか。『1.全く当てはまらない』から『7.非常に当てはまる』のうち、最も近いものを一つ選んで数字を選択してください。」で、「まったく当てはまらない」から「非常に当てはまる」までの7件法（1～7点）で評定を求めた。

2. 選択回避尺度

選択回避を測定する尺度として、谷（1999）による「選択回避尺度」を使用する。この尺度は、Erikson（1959）の「選択の回避」という概念化に基づき作成された5項目からなる一次元尺度である。「まったく当てはまらない」から「非常に当てはまる」までの7件法（1～7点）。本研究における α 係数は、 $\alpha=.788$ であった。

3. モラトリアム尺度

下山（1992）が作成したモラトリアム尺度を使用する。「回避（6項目）」「拡散（6項目）」「延期（6項目）」「模索（6項目）」の4つの下位尺度からなる。「当てはまらない」から「当てはまる」までの3件法（1～3点）。本研究における α 係数は、「回避」で $\alpha=.734$ 、「拡散」で $\alpha=.791$ 、「延期」で $\alpha=.692$ 、「模索」で $\alpha=.582$ であった。その中、「模索」のみ α 係数が低いので、本研究において除外した。

3. 結果

（1）進路選択による自己明確化尺度の主成分分析

一次元構造が仮定されるため、進路選択による自己明確化尺度の10項目について主成分分析を行った。結果をTable1に示す。それによれば、いずれの項目においても、第1主成分負荷量が.657～.878と高かった。第1主成分から第3主成分までの寄与率は、60.82%、8.48%、6.04%となっており、第1主成分への

寄与率が高く、また第2、3主成分では寄与率が非常に大きく落ち込んでいる。固有値についても同じ傾向があり、第3主成分までの固有値は順に、6.082、.848、.604と、第1主成分から第2主成分にかけて非常に大きく落ち込んでいる。そして、第2主成分以降に、高い負荷を示している項目はないことを確認した。これらのことから、進路選択による自己明確化尺度は明らかな一次元構造をもっていることが確認され、項目を除外する必要がなく、全ての10項目を以て進路選択による自己明確化尺度とすることにした。平均値（SD）は、38.20（11.50）であった。

（2）進路選択による自己明確化尺度の確認的因子分析

進路選択による自己明確化尺度が、一因子モデルを仮定した場合、データとモデルが適合しているかを確認するために、確認的因子分析を行った。その結果、適合度指標は、GFI=.906、AGFI=.852、CFI=.949、RMSEA=.096であった。RMSEAの値が高いものの、0.1未満なので、一因子モデルとして採択できる水準のものと判断した。

（3）尺度の信頼性

進路選択による自己明確化尺度に関して、全調査協力者192名のデータについて α 係数を算出したところ、 $\alpha=.928$ であった。したがって、作成した進路選択による自己明確化尺度は、尺度全体として一貫した概念を測定しており、高い信頼性を有することが確認できたといえる。

Table1
進路選択による自己明確化尺度の主成分分析結果

		PC1
1	現実社会の中で、どういう進路が自分に適するか明確になってきた。	.796
2	進路についていろいろ考えた上で、自分に適した進路が何であるか明確になってきた。	.878
3	自己への問い直しによって、自分にとって望ましい進路は何であるか明確になってきた。	.811
4	さまざまな役割を観察したり担ったりした上で、将来のなりたい自己を見出した。	.746
5	はっきりした適性を自覚した上で、どういう進路が自分にふさわしいのか明確になってきた。	.841
6	進路について探索した上で、自分の社会において果たしたい役割が明確になってきた。	.737
7	社会に与えられている様々な職業を理解した上で、働く世界における自分の進むべき道を見出した。	.791
8	進路選択によって、大人の世界における自分の役割を現実的に発見することができた。	.813
9	現実吟味の上で、自分がどんなことができるのかわかってきた。	.657
10	進路に関するいろいろな試行錯誤を通じて、自分の適性と興味について改めて理解した。	.702

Table2
各尺度の相関係数

	選択回避	回避	拡散	延期
自己明確化	-.384***	-.550***	-.404***	-.305***

*** $p<.001$

(4) 尺度の妥当性

各尺度の相関係数を Table2 に示す。進路選択による自己明確化尺度と選択回避尺度・モラトリアム尺度との相関係数を求めたところ、すべて 0.1%水準で有意であった。

進路選択による自己明確化尺度と選択回避尺度には、 $r = -.384$ ($p < .001$) の相関係数を示し、中程度の関連性があることが示された。

進路選択による自己明確化尺度とモラトリアム尺度については、全体的に中程度の負の相関係数 ($p < .001$) を示し、関連性が高いことが示唆された。モラトリアムの下位尺度ごとに見ていくと、回避との相関が $r = -.550$ と最も高く、ほかの 2 つの下位尺度との相関係数もいずれも高かった。

これらの結果より、構成概念妥当性における収束的妥当性の観点からは、選択回避尺度・モラトリアム尺度と中程度の相関があったため、構成概念的妥当性が示された。

4. 考察

本研究では、Super (1957) の理論に基づき、進路選択過程における自己明確化に着目した尺度を作成した。これまで、進路選択を発達のプロセスとしてとらえ、進路選択における自己概念の明確化に焦点を当てた実証的な研究が非常に少なく、進路選択による自己明確化を測定できる明確な一次元尺度を作成した点において、進路選択研究に関して、大きな意義があるといえる。

今後の課題として、本研究では、内的整合性の観点からの信頼性のみを確認したが、再検査法による信頼性の検討を行う必要がある。そして、妥当性について、構成概念妥当性における収束的妥当性のみ検討したが、弁別的妥当性の検討も行う必要がある。

さらに、今回作成した進路選択による自己明確化尺度を用い、進路選択による自己明確化、または進路選択過程そのものが、いかにアイデンティティ形成や自己形成と関連しているのかを検討するのも今後の課題と言えよう。

引用文献

- 安達 智子 (2008). 女子学生のキャリア意識——就業動機、キャリア探索との関連—— 心理学研究, 79, 27-34.
- 安達 智子 (2010). キャリア探索尺度の再検討 心理学研究, 81, 132-139.
- Bartley, D. F., & Robitschek, C. (2000). Career exploration: A multivariate analysis of predictors.

Journal of Vocational Behavior, 56, 63-81.

- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle*. New York: W.W. Norton & Company.
- Gati, Krausz & Osipow (1996). A Taxonomy of Difficulties in Career Decision Making. *Journal of Counseling Psychology*, 43, 510-526.
- 小此木 啓吾 (1977). モラトリアム人間の時代 中央公論社.
- 大西 将史 (2017). 大学生の就職活動を通じた自己形成—就職活動による自己成長感尺度の作成とアイデンティティとの関連性の検討 福井大学教育実践研究, 42, 37-46.
- 下村 英雄 (1996). 大学生の職業選択における情報探索方略—職業的意思決定理論によるアプローチ 教育心理学研究, 44, 145-155.
- 下山 晴彦 (1992). 大学生のモラトリアムの下位分類の研究 教育心理学研究, 40, 121-129.
- Super, D. E. (1957). *The Psychology of careers: An introduction to vocational development*. New York: Harper & Row.
- (Super, D. E. 日本職業指導学会 (監訳) (1960). 職業生活の心理学—職業経歴と職業的発達— 誠信書房)
- Super, D. E., & Bohn, M. J. (1971). *Occupational Psychology*. California: Wadsworth Publishing Co Inc.
- (Super, D. E., & Bohn, M. J. 藤本喜八, 大沢武志訳 (監訳) (1973). 企業の行動科学: 職業の心理 ダイアモンド社)
- Stumpf, S.A., Colarelli, S.M., & Hartman, K. (1983). Development of the Career Exploration Survey (CES). *Journal of Vocational Behavior*, 22, 191-226.
- 高村 和代 (1997). 課題探求時におけるアイデンティティの変容プロセスについて 教育心理学研究, 45, 243-253.
- 谷 冬彦 (1999). 青年期における選択の回避—選択回避尺度の作成— 日本教育心理学会総会発表論文集, 41, 516.
- 浦上 昌則 (1996). 女子短大生の職業選択過程についての研究—進路選択に対する自己効力、就職活動、自己概念の関連から— 教育心理学研究, 44, 195-203.

付 記

尺度項目の内容的妥当性を検討していただき、貴重なご教示をいただきました東京経営短期大学の神野雄先生に御礼申し上げます。